

## 「多摩市みどりのルネッサンス」あとがきにかえて

### ～これからの公園緑地のオープンな活用と新たな展開について～



#### 「多摩市みどりのあり方懇談会」

会長 涌井 史郎

造園家

東京都市大学環境学部教授

岐阜県立森林文化アカデミー学長

中部大学・中部高等学術研究所 客員教授

東京農業大学・地域環境科学部 客員教授

時代は、豊かさを追い求める時代から深める時代へ、コミュニティの再生に向かっています。

先の大震災以降、社会が今までの利益結合型社会から、地縁結合型社会へと大きくシフト（転換）している今、かけがえのないみどりは社会を結ぶ大切なつなぎ手のひとつになっています。

## 1. 公園緑地のオープンな活用について

「多摩市みどりのあり方懇談会」では、「多摩市みどりのルネッサンス」の推進にあたって、市民の皆さんが公園や緑地にどのように関わっていくのか、という大きな命題に対して平成24年度から3年間、議論を重ねてきました。

多摩市のみどりを、公共の公園緑地を中心に論ずると、まず考えなくてはならないのは、公園緑地には利用するという効用と、そこに存在するという効用の二つの効用があることに気づきます。例えば、生物多様性条約第11回締約国会議での提案に「自然を守れば自然が守ってくれる」という言葉があるように、そこに公園があることによって生物多様性が守られているとか、災害が起きた時に、そこにみどりがあるだけで非常に大きな減災効用を生んでいます。

このように、公園緑地のさまざまな多面的機能による利用効用という議論だけではなく、存在効用といえる議論もあるのではないのでしょうか。

市民にとっては、多摩市のみどりはもともと存在しているものという認識から、漠然とみどりが多いという印象で投影され、日常的に公園緑地を利活用している方以外の人々にとっては、みどりの関わり方が薄いというのがこれまでだったと思います。また、現状での公園緑地の利用効用という面においても行政の財政的な問題、職員の数の問題、あるいはさまざまな意見の対立や利害の衝突があることで、どうしても内向きな利活用の議論に終始してしまい、市民のライフスタイルに合致して開かれた創造的な展開には、なかなか向かうことができていません。

一方、都市の公園緑地は、都市計画法や都市公園法による明確な位置付けを持った場所であると同時に、市民の方々の多様なニーズもしっかり受け止める場所でもなくてはなりません。また、それと同時に生物多様性の保全や多摩丘陵全体の存在効用の見地から、しっかり守っていかなければ東京のみどりは駄目になってしまうという、高い意識を持っておられる方々も多くいらっしゃいます。多摩市には、そのような高い問題意識のもとに日々活動しておられる市民がいらっしゃるというのも、素晴らしいポテンシャルの一つだと思います。このような市民の皆さんの活動が、盛んになればなるほど本報告書4頁の利用領域の楕円は円に近づきます。

今後は、さまざまな視点から先を見据え、公園緑地をコントロールしていかないと駄目になるのではないかと、市民のライフスタイルにあったオープンな展開には進まないのではかと考えます。なぜなら、行政の宿命から、取組みが先取りより後追いになりがちだからです。

## 2. 中間的組織による新たな展開への可能性

市内すべての公園を、行政だけでコントロールできるのか。これはなかなか難しい問題です。そこで本報告書4頁のステップ2の図に、オレンジの斜線を入れています。これは新たなマネジメントの仕組みと、体制検討の矢印です。

この斜線の意味は、今までの縦割り行政のピラミッドを打ち破ろうとするものです。市民と行政が一体となって管理する、あるいは指定管理させるといった、多様な参画のチャンネルが生まれる可能性を高めるものです。そこでは、専門家からのアドバイスが必要な場合もあります。

そういうさまざまな場面でのアクティビティをもとに、学術的な価値や市民のニーズへの対応を図るには、公園緑地の維持管理をどのように施すかということについて、適正に判断する中間的な組織が必要ではないかということが、検討の内から浮上しました。

今までのように、市の公園緑地課という部門だけでこれをやっていたのでは、対応が困難です。ましてや活動領域が広がれば広がるほど、いろいろ対応が必要となります。

そこで、市民や行政・事業者が一体となった中間的組織を新たに設け、それが公園緑地のコントロールに寄与していくという体制が必要になると考えました。

「多摩市みどりのルネッサンス」の基本理念である、「愛でるみどりから関わるみどりへ」というスタートができるかということは、地域のコミュニティをもとにした公園緑地として、利用効用と存在効用の合意形成を、誰が調整し問題をどのように解決するかにかかっています。なぜなら、市民同士が自主的に調整できる体制というものが無ければ、意見の衝突や対立が放置されてしまう恐れがあるからです。

そういう意味で、地域コミュニティによる「自助・共助・公助」の関わりを含む公園緑地の新たな展開「みどりのルネッサンス」を推進していく動力（エンジン）として、どのような体制（中間的組織）が良いのかを検討することが、今後、とても重要になってくるのではないかと考えます。

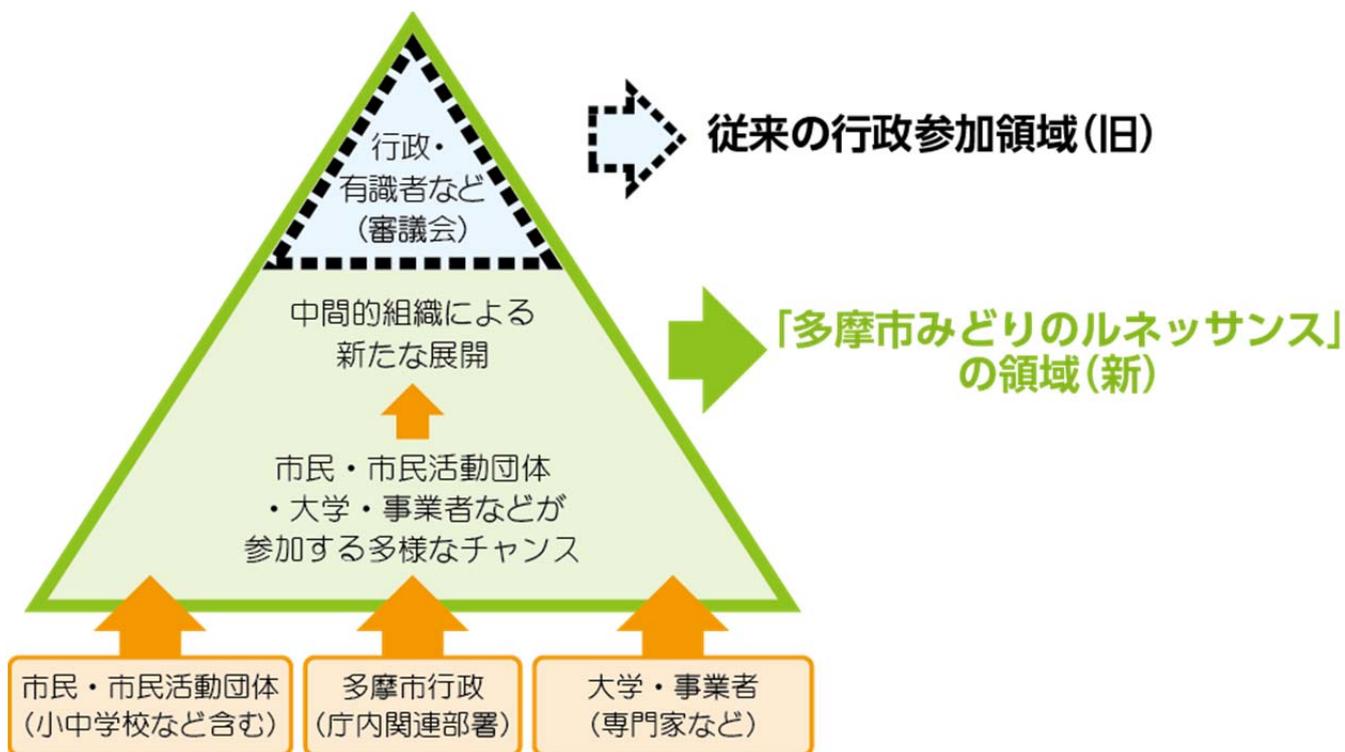
## 3. 市民協働のピラミッドとは

私が考える「みどりのルネッサンス協働のピラミッド図」を、次頁に入れました。市民や事業者などが支える公園緑地などのみどりでは、みどりへの関わり方を楽しむ方々やみどりへ愛着をもつ方々がいて、多様なニーズやライフスタイルの実現をしたい方々を含め、みどりを通じたコミュニティデザインやコミュニケーションをより深めたい方々などに適応した、多様な参加形態の体制づくりがとても重要なのです。

多摩市には、多様な公園緑地がたくさんあります。市民ニーズを上手く反映しながら公園緑地の利用効用と存在効用の拡充を図るために、自分が積極的に関わって意見を言い、自らもそこに責任を果たしていく。こういう協働の関係性を、公園緑地を媒体にして作り上げていくことが、多摩市のみどりのルネッサンスではないかと考えます。

「多摩市みどりのルネッサンス」の取り組みが、多摩市らしいライフスタイルの創造につながるものとして、市民のみなさんのみどりへの関わりを期待しております。

最後に、「多摩市みどりのあり方懇談会」委員の皆様におかれましては、貴重なご意見、ご提言を賜り、ここに改めて御礼を申し上げます。



みどりのルネッサンス協働のピラミッド図

## ○「多摩市みどりのあり方懇談会」委員構成

「多摩市みどりのあり方懇談会」は、下記委員の皆様で意見・討論を重ね、本「みどりのルネッサンスへの取り組み」について、とりまとめをいただきました。

役割	氏名	所属など	主な分野
会長	涌井 史郎	東京都市大学 環境情報学部 教授	造園
副会長	大石 武朗	元 住宅・都市整備公団 東京支社多摩ニュータウン 事業本部 工事部長	造園 樹木医
委員	梅澤 佳子	多摩大学 経営情報学部 教授	地域社会
委員	中村 光毅 (～平成 25 年度)	多摩市みどりと環境審議会 会長 (平成 24 年度～平成 25 年度) 中央大学 経済学部 客員講師	環境経済
委員	沼田 真也 (平成 26 年度～)	多摩市みどりと環境審議会 会長 (平成 26 年度～) 首都大学東京 都市環境科学研究科 准教授	環境科学
委員	宮内 泰之	恵泉女学園大学 人間社会学部 准教授	造園
委員	森 正	元 東京都公園緑地部 上野公園みどりの相談所 所長	造園

(敬称略)